約250人が訪れ、講演や対談に聴き入った

西郷さん（右）と東川さんの対談では「西郷どん」の台本も披露された（エンシティホテル延岡）

延岡 46、47話に登場か

対談 西郷隆夫さん（隆盛のひ孫）東川隆太郎さん（方言指導）

「西郷どん」放映記念講演会

NHK大河ドラマ「西郷どん」の放映を記念した講演会（延岡市主催）が2日、同市紺屋町のエンシティホテル延岡であった。西郷隆盛のひ孫にあたる西郷隆夫さん（54）とドラマの史料取材に協力し、原作本で方言指導した東川隆太郎さん（46）の対談もあり、東川さんは「延岡は46話と47話（最終回）に出てくると思う」と述べ、集まった約250人の市民らを大いに沸かせた。

東川さんは、「西郷どん」スタッフと来延したことを振り返り、「しっかりと史跡が残され、物語にしやすいという印象を持った。イトが菊次郎のために延岡に来ていたという話はとても興味深かった」と話した。

終盤に差し掛かった「西郷どん」に延岡の登場はあるのか―と市民の関心は高まる一方。明言は避けたものの、東川さんが「延岡は全国の人たちに感動をもって知られることになると思う」と話すと、会場から大きな拍手が湧き起こった。また最終回について「私もどこかで出て来る。楽しみながら見てください」と付け加え、笑いを誘っていた。

また、2人は、大河ドラマが日本各地のあまり知られていない文化、資料の掘り起こしにつながっている点にも注目。「登場人物にゆかりある土地の人の話から新たな史実が判明することもある」（隆夫さん）、「延岡の方々には、放映をきっかけにより深い検証をぜひ行ってほしい」（東川さん）と呼び掛けた。

対談に先立ち、「子孫から見た西郷隆盛」と題して講演した隆夫さんは「父から毎日隆盛の話を聞かされていた。関西在住だったのに家ではいつも鹿児島弁だった」。

隆盛が軍の解散を決め、明治天皇から頂いた陸軍大将の軍服を焼き、子・菊次郎と別れた場所として「父は延岡が西南戦争における心の終焉（しゅうえん）地だった、延岡の人たちのおかげで隆盛は城山まで帰ってくることができたと言い続けていた」とし、来延の機会がなかった父親に代わって謝意を伝えた。

隆夫さんは、隆盛の言葉「天は人も我（われ）も同一に愛し給ふゆえ、我を愛する心をもって人を愛するなり」、妻イトの言葉「愛することは愛されることへの終わりない奉仕」、和田越決戦で戦死した旧延岡藩士駒木根信成の辞世の歌「晃（しかばね）は野にさらすとも武士（もののふ）の尽すまことは果さざらむ」を挙げ、「当時の人たちが胸に抱えた思いを後世に伝えていくことが大切だと思う」と結んだ。

学校の友人らと会場に来ていた矢山海大君（南中1年）は「授業で学んだ西郷隆盛について深く知ることができた。『西郷どん』も最後の2話を楽しみにしながら見ていきたい」と話した。

参加者と談笑する西郷隆夫さん（右）＝延岡市北川町の北川御陵墓参考地前

40人がゆかりの地巡る

西郷さん、東川さんと一緒に

西郷隆夫さん、東川隆太郎さんと一緒に延岡市内の西郷隆盛ゆかりの地を巡るバスツアーが3日、同市内であった。約40人が西南戦争の決戦地や資料館などを見て回った。

ゆかりの地を観光資源と位置付ける市が企画した。バス2台に分乗した一行は同戦争最後の激戦地、和田越に移動。ガイドの西沢弘人さんから当時の様子などの説明を受けた後、「和田越決戦之地碑」に合掌した。

この後、薩軍が宿陣した旧児玉熊四郎邸の「西郷隆盛宿陣跡資料館」や二ニギノミコト御陵墓参考地、隆盛の息子・西郷菊次郎が加療した児玉惣四郎邸を見学。資料館では、西郷さんが隆盛にまつわるエピソードを披露した。

友人と4人で参加した延岡市の女性は「大河ドラマを見ているので感激している。もっと多くの人に知ってもらいたい」と話した。

和田越でガイドの西沢さん（右）から説明を受ける参加者

2018.1

「海を知る」宮大公開講座

「みやざきサクラマス――魅力的なネーミング必要」

宮崎大学の公開講座「海を知る」（延岡市教育委員会共催）の第5回はこのほど、市社会教育センターで開き、農学部の内田勝久教授が新しい地域ブランド魚「みやざきサクラマス」の生産や効率化、今後の展望などを説明した。講座はこの日が最終回。終了後、受講者に修了証が渡された。

みやざきサクラマスの魅力を語る内田教授（延岡市社会教育センター）

みやざきサクラマスは、川の上流域で一生を過ごす「陸封型」のヤマメを五ケ瀬町の養殖場から延岡市内の港に移し、海水で育てる。淡水で比べて10倍近く大きくなり、筋肉疲労の抑制や抗酸化作用などの効果が期待できる成分が増える。成熟した個体から卵を取り出し、稚魚を生産する循環型養殖を確立できるという。

一方、全国各地で同様の「ご当地サーモン」の生産が行われているため、内田教授は差別化とPRがポイントと指摘。効率的な養殖方法の確立や、より高い海水温でも養殖できる個体の育成に取り組んでいると説明した。

また、消費者に訴えるためには魅力的なネーミングが必要だとし、「北東アジアは和食ブームでビジネスチャンス。みんなでサクラマスの未来を考えて、延岡の魚にしていきましょう」と呼び掛けた。

（延岡出身の詩人）

11月4日 渡辺修三の詩碑祭

延岡市出身の詩人渡辺修三の詩碑祭が、11月4日午前10時から同市大野町の詩碑前広場で開かれる。

詩碑は平成25年3月の建立。一昨年と昨年は修三の命日（9月9日）に合わせて詩碑祭を開いたが、残暑の厳しい時期に当たることから日程を変更した。この日は近くの祝子川右岸河川敷で黒岩地区の秋祭りも開かれる。

主催する顕彰会（湯浅一弘会長）は、このほど開いた合同役員会で当日の流れを確認した。黒岩小中学校の児童生徒が修三作詞の校歌を斉唱、東海幼稚園の園児が詩碑に刻まれた「天使たち」の詩を朗読するほか、地元のニューミュークルーブによる合唱も予定されている。

顕彰会は、詩碑建立の経緯などを小冊子にまとめることにしており、この日の役員会で編集委員会を立ち上げた。発刊は3年後をめどにしており、湯浅会長は「後世に残る冊子にしたい」と述べた。

渡辺修三は同市尾崎町出身。大正10年に旧制延岡中を卒業。早稲田大英文科に進み、西条八十に師事。昭和3年に初めての詩集「エスタの町」を刊行し、注目された。延岡高校、黒岩小をはじめ12校の校歌を作詞するなど郷土の詩人として親しまれた。

延岡市大野町にある渡辺修三の詩碑

2018.10.4